

保守系オピニオン誌における外国人言説(1) —1990年代前半までの雑誌『SAPIO』を中心に—

Discourse on Foreigners in Japanese Conservative Opinion Magazines(part 1):
Focusing on Magazine Articles of *SAPIO* until the first half of 1990's

倉 真 一

本稿は1980年代以降に創刊された新興の保守系オピニオン誌の一つである『SAPIO』における外国人言説を考察したものである。1989年の創刊から1990年代前半までの在日外国人に関連する記事を分析した結果、「われわれ=日本人」という主体による「混住社会ニッポン」の実現が90年代初頭には語られていたが、そこで暗黙に想定されていた「外国人」とは、『SAPIO』の主要な読者である企業サラリーマン層からみて同質性が高く、理解可能でコントロール可能な客体、いわば他者性を縮減された「外国人」であった。しかし「外国人犯罪」に関する記事のなかで、「外国人」=加害者(主体)と「日本人」=被害者(客体)という図式が強まり、「外国人」を理解やコントロールが困難な他者性を孕んだ主体として表象するようになるにつれ、最初期の「混住社会ニッポン」を構想する主体としての「われわれ=日本人」という言説は後退し、やがて「混住」というキーワードは誌面上から消えてしまう。かわりに誌上に現れたのは、日本社会にとって<有益な外国人>-<有害な外国人>という二項対立的な図式であり、それが1990年代後半以降における『SAPIO』の外国人言説の基調をなすことになる。

キーワード：保守系オピニオン誌、外国人言説、他者性、主体と客体

目 次

- I はじめに
- II 新興保守系オピニオン誌としての『SAPIO』
- III 分析上の時期区分
- IV 第一期(1989年~1993年) - 「混住」というキーワード -
 - (1) 第一期前半(1989年~1991年) - 他者性なき「外国人」と「混住社会ニッポン」-
 - (2) 第一期後半(1992年~1993年) - ゆらぐ政策主体としての「われわれ=日本人」-
- V 第二期(1994年~1995年) - <有益> 対 <有害> 図式の萌芽 -

I はじめに

本稿では日本における保守系オピニオン誌の外国人言説^①を、新来外国人の日本への流入が「開国・鎖国」論争といった形で政治的な争点ともなった1980年代末から、90年代を経て現在に至る時期を中心に分析したいと思う。分析対象をオピニオン誌とした理由、さらにすべてのオピニオン誌ではなく保守系オピニオン誌とした理由は以下のとおりである。

筆者はこれまで主に雑誌記事におけるイラン人をはじめとする在日外国人イメージの変遷、およびマスメディアにおける外国人言説と日本における近年の外国人政策について考察してきたが[倉, 2000][倉, 2002]、オピニオン誌とは様々な外国人言説と外国人政策との関係をより具体的に検証できるメディアとして捉えることが出来るのではないだろうか。複数の外国人表象や外国人言説の絡み合いのなかから、あるベクトルを持った外国人政策とそれを支持していくような主体が構築される場の一つとしてオピニオン誌は分析可能なのではないかと、というのが第一点。

第二に、オピニオン誌のなかでも保守系オピニオン誌に注目したのは以下の理由による。吉見俊哉は「雑誌メディアとナショナリズムの消費」という論考のなかで、「90年代の日本におけるナショナリスティックな不安の意識の拡大がグローバル化の急速な進行を背景にしていることは明らかであるにしても、われわれはこのプロセスを、同時にある一定のジャンルのメディアによって複合的に媒介された言説消費の過程として把握していく必要がある」との指摘を行っている。ここでいう「ある一定のジャンルのメディア」には、「90年代以降のナショナリズム言説を担っていく『諸君』『正論』『Voice』から『SAPIO』など保守系雑誌」[吉見, 2003: 274]が含まれるが、これら保守系オピニオン誌のナショナリズム言説のなかには在日外国人に関する諸言説一例えば外国人犯罪や外国人参政権に関する言説などが共通して見られること。

要するにグローバル化の進行のなかで日本における外国人政策はどうなっていくのか。あるいはグローバル化とナショナリズムの高揚、それらと様々な外国人言説はどうむすびつくのか。これらの疑問に答えるための予備的作業として、ここでは保守系オピニオン誌に注目したい。ただし本稿では、すべての保守系オピニオン誌における外国人言説を論じるのではなく、それらのなかの一誌、具体的には小学館から刊行されている雑誌『SAPIO』における外国人言説にしばって分析を行う。次節では『SAPIO』を分析対象として選んだ理由について、保守系オピニオン誌としてこの雑誌が持つ特徴を明らかにしつつ述べたいと思う。

II 新興保守系オピニオン誌としての『SAPIO』

『SAPIO』は小林よしのりの「新・ゴーマニズム宣言」が連載されていることでよく知られた雑誌である。創刊は1989年、発行部数は印刷証明付部数で147,636部である。保守系オピニオン誌の主要誌と比較した場合、『文藝春秋』の同673,916部は別格としても、同じく文芸春秋社の『諸君』(同83,375部)、産経新聞社の『正論』(同94,371部)、PHP研究所の『Voice』の公称約10

万部のそれを上回る²⁾。さらにこれらの老舗の雑誌とは別に、『SAPIO』と同時期の1980年代末から90年代にかけて創刊した他の新興保守系オピニオン誌、例えば集英社の『Bart』、講談社の『Views』、読売新聞社の『This is 読売』と比べた時、これらの雑誌が90年代末までにどれも休・廃刊となっているのとは対照的に、現在も刊行を続けているのが『SAPIO』である。要するにこの雑誌は老舗の保守系オピニオン誌と部数において伍するとともに、新興保守系オピニオン誌間の競争を生き延びた、いわば「勝ち組」の雑誌でもあったことになる。以上の点から吉見が指摘した90年代以降の保守によるナショナリズム言説において、『SAPIO』が占めた重要な位置の一端を推測することが出来よう。

ここで日本雑誌協会ウェブサイト(2005年10月末現在)上の「JMPA読者構成データ」を参考に保守系オピニオン誌の読者層についてみてみよう。『SAPIO』の読者構成は、年齢で最も多いのが25～29歳(26.8%)、次いで30～34歳(19.8%)、20～24歳(19.5%)となっており、その中心的な読者層は20代から30代前半の若い層といえる。これに対して老舗の保守系オピニオン誌である『諸君』では、最も多い順に55～60歳(18.5%)、45～49歳(15.0%)、50～54歳(13.0%)、60～64歳(11.0%)となり中心的読者の年齢は40代後半から60代と高くなる。『文藝春秋』なども同様である。

その他の性別、職業、学歴では老舗か新興かを問わず、保守系オピニオン誌には共通した特徴が見られる。性別では男性が圧倒的に多く(『SAPIO』86.4%、『諸君』92.6%、『文藝春秋』60.1%)、職業は会社員が中心であり(会社役員、一般管理職、専門技術職、事務職、営業職の合計で、『SAPIO』55.2%、『諸君』52.6%、『文藝春秋』54.3%)。ただし『SAPIO』の場合は年齢層が若い分、学生の割合が11.7%と比較的高い)、学歴は6割以上が大学・大学院卒である(『SAPIO』66.0%、『諸君』66.4%、『文藝春秋』60.1%)。吉見が指摘するように、「『世界』の、学生が28%、会社員が19%、公務員が18%、教員が15%という読者層の構成と比べて」[吉見, 2003: 275] みれば、これら保守系オピニオン誌の主要な読者層が男性を中心とした企業サラリーマンであることは明白である。

以上の読者層という点から改めて新興保守系オピニオン誌としての『SAPIO』の特徴を述べれば、20代から30代前半の若年層で男性中心の企業サラリーマンおよび学生を主要な読者としている点にあるといえる。だとすれば『SAPIO』が担った90年代以降の保守的言説における重要な位置とは、先述のような職業的かつジェンダー的なバイアスのかかった形での若年層への保守的なナショナリズム言説の浸透におけるそれであったといえるだろう(先に紹介した吉見の論考では「次第に20代の学生や会社員にまで浸透」[吉見, 2003: 275]となっている。この論考の初出は1998年であり、現在では主要な読者層は時間の経過とともに30代前半におけるボリュームを厚くした可能性がある)。

さらに本稿で取り上げる外国人言説という観点からみても、『SAPIO』にはある特徴的な面がみられる。先述のように保守系オピニオン誌にはナショナリズム言説の一環としての外国人言説

が見られるが、『SAPIO』の場合には語られる外国人言説の「量」が、他の保守系オピニオン誌と比較しても多いように思われるのである。外国人言説を定量的に測定することは困難ではあるが、ここでは大まかな指標として、『大宅壮一文庫雑誌記事索引CD-ROM版』を用い、検索キーワード「外国人」でヒットした記事数を各年ごと（1988年～2003年）に主要な保守系オピニオン誌と比較したデータを示す（表1参照）⁽³⁾。

表1 主要保守系オピニオン誌のうち見出しに「外国人」が含まれる記事数の推移（1988年～2003年）

雑誌名\年	1988	1989	1990	1991	1992	1993	1994	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003	合計
SAPIO	-	6	11	14	14	23	11	11	7	18	15	18	11	11	15	9	194
Bart	-	-	-	-	0	0	8	8	2	4	2	7	0	-	-	-	31
Views	-	-	-	7	24	55	22	6	0	2	-	-	-	-	-	-	116
文藝春秋	3	6	2	6	9	1	3	7	6	1	2	9	2	4	5	5	71
諸君	2	0	0	0	0	0	0	3	1	4	13	16	14	4	4	1	62
正論	14	0	0	0	0	0	0	0	0	-	0	0	1	2	0	2	19
Voice	3	4	2	3	9	0	6	1	1	2	2	2	1	0	1	3	40

(資料)大宅壮一文庫『大宅壮一文庫雑誌記事索引CD-ROM版』紀伊国屋書店、各年版より筆者作成。検索語＝外国人。

(注)『This is 読売』はデータの欠落が多数のため除外。「-」は未刊行もしくは休・廃刊、データ欠落のため検索ヒットなし。

表1によると、記事タイトルに「外国人」が含まれる記事の総数は、『SAPIO』が創刊された1989年から2003年までの合計で『SAPIO』が194件であり、同期間で比較可能な『文藝春秋』の68件、『諸君』の60件などを上回っている。これは雑誌の刊行形態が『SAPIO』が月2回刊、上記の二誌が月刊であることを考慮してもなお多いといえるだろう。さらに外国人に関連する記事がどの年でも比較的安定してみられるのも『SAPIO』の特徴である。創刊以来、主要な保守系オピニオン誌のなかで最もヒット記事数が多かった年は1989年～2003年の15年間のうち11年になり、記事の件数が10件未満だった年は3年にすぎない。これは他誌のデータ、例えば『文藝春秋』のヒット件数がどの年も一桁台であり1～3件にすぎない年も散見されることや、『諸君』『正論』においてはヒット数がゼロの年も多いこと、あるいは1993年前後の『Views』が圧倒的に記事数が多い時期とそうでない時期の落差が大きいことなどと比べてみると明らかである。

以上のように雑誌『SAPIO』は他の保守系オピニオン誌と比較した場合、何らかの外国人関連の記事を継続的に掲載してきた点で際だった存在といえる。それは後で詳述するように、「混住後進国日本をうろたえさせる『外国人犯罪』」（1992年12月10日号）や「外国人たちのニッポン占領」（1997年1月15日号）といった直接・間接に在日外国人と関連する多くの特集記事が組み込まれてきたことと合わせ、この雑誌が「外国人」に対する強い関心を90年代を通じて現在まで保持してきたことを示している。

では『SAPIO』が保持してきた「外国人」への強い関心のもと、いったいどのような外国人言説が紡ぎ出されてきたのだろうか。以下で検証してみよう。

Ⅲ 分析上の時期区分

ここではまず雑誌『SAPIO』に掲載された記事や特集のなかから、『大宅壮一文庫雑誌記事索引CD-ROM版』を用いて、見出しにキーワード「外国人」が含まれており、且つ内容が在日外国人に関する記事や特集、および見出し語に「外国人」は含まれないが明らかに在日外国人に関する内容の含まれている記事や特集をピックアップした。そのうえで記事や特集のテーマやトピック、見出し語に類出する単語などの特徴や時系列的な変化を考慮して、雑誌の創刊時(1989年)から現在までを5つの時期に区分した。ただし、この時期区分は分析作業上の便宜によるものであり、時期区分の境界は必ずしも厳密なものではなく大まかな目安であることを確認しておきたい。

以下では第一期から第五期までの各時期における在日外国人関連記事の概要を述べ、続いて1990年代前半までの第一期と第二期について詳しく分析していきたい。第三期以降については、次の機会に改めて論じることとしたい。

① 第一期(1989年～1993年)

第一期の特徴は、「混住」というキーワードによって要約することができる。「混住」というのは、具体的には日本人と外国人が日本国内において混住する状況を指している。この時期の代表的な記事・特集としては、「信長に学ぶ混住思想」(1991年11月14日号)および「混住後進国ニッポンをうろたえさせる『外国人の犯罪』」(1992年12月10日号)、「外国人犯罪黒書」(1993年9月23日号)がある。しかし「混住」という言葉は、1993年9月23日号の記事を最後に在日外国人関連記事の見出しからは姿を消すことになる。

② 第二期(1994年～1995年)

この時期の特徴は、「外国人犯罪」が記事のトピックとして前面に出るようになったところにある。代表的な記事・特集としては、「犯罪輸出大国・中国の罠」(1994年10月27日号)がある。その意味では先述した第一期の1992年12月10日号などの特集も該当しそうだが、記事の執筆者や言説のスタイルで前者と後者の間には相違点の方が目立つ。これが1993年以降を第二期とした理由である。

③ 第三期(1996年～1998年前半)

第三期は比較的在日外国人関連の記事が少ない時期であるが、それでも特集などが何件か組まれている。この時期の特徴を簡潔に言えば、揺らぐナショナル・アイデンティティへの不安、ということになるだろうか。例えば特集『『日本』よ、お前はいったい何者か?』(1996年6月12日号)では、「不法就労者」や「中国人労働者」が「闊歩する」歌舞伎町の一角に立ったルポライターの叫びを記事タイトルにして増殖する「アジア」への不安が示される。また特集「外国人たちのニッポン占領」(1997年1月15日号)も「拡大する無法地帯、ボーダーレス・ビジネス……融解を始めた『日本』の最前線レポート」と銘打って、同様の不安が暗示される。

④ 第四期（1998年後半～2002年前半）

この時期の記事の特徴は、外国人犯罪が「治安」という枠組で語られるようになった点と、在日外国人の多様性を（犯罪にコミットする）有害な外国人—無害な外国人or有益な外国人という二項対立的な認識軸にそって明瞭に語るようになった点にある。

第四期における前者の最初の記事は「日本が治安大国なんて大ウソだ 武装・凶悪化『外国人犯罪』が急増している！」（1998年10月28日号）であり、その後も「日本の治安は崩壊している」（1999年8月11日号）や「戦慄の『凶悪中国人犯罪』」（2001年10月10日号）、「これでいいのか！『犯罪天国』日本」（2002年3月13日号）で治安問題としての外国人犯罪が語られる。このような形で外国人の「凶悪」犯罪が取り上げられる一方、問題の少ない外国人や有益な外国人も取り上げられる（例：「激変 日本人が知らない在日外国人の生き様」1999年3月10日号）。特に2000年6月14日号は、「『お雇い外国人』プロジェクト」で「日本」にとって有益な「お雇い外国人」を特集する一方で、「これが石原都知事が指摘した『TOKYO危険地帯』だ！」では、逆に都知事の「三国人」発言⁴を受けて、いわば「日本」にとって有害な「外国人犯罪のメッカ」新宿・歌舞伎町の「潜入」レポートを掲載するなど、第四期の特徴がよく現れた号といえるだろう。

⑤ 第五期（2002年後半～）

この時期の特徴の一つは、第四期の外国人犯罪という「治安問題」という問題設定から更に進んで、新たに「治安対策」の焦点としての外国人という問題設定が加わった点にある。「治安対策」の対象として外国人を捉える視点は、特集「ニッポン『治安非常事態』を宣言する！」（2002年11月13日号）で明確になり、その後の特集「日本の『国防&治安』大革命」（2003年9月3日号）でも継続して認められる。また「治安対策」の対象とみなされているのは犯罪を犯した外国人に限定されるものではない。記事「実業家、エリート、犯罪者、すべてがつながり一体と化している 旧態依然の中国人観を改めなければ『100万人の在日中国人』に対処できない」（2002年11月27日号）において暗示され、2003年5月28日号の記事「犯罪予備軍『突撃密航』『留学生崩れ』日本の不況が彼らの『犯罪圧』を高めている」では「犯罪予備軍」という形で明示される言説のスタイルは、犯罪にコミットする潜在的傾向を有する集団として在日外国人を捉えるものといえるだろう。

以上の点をふまえた上で、80年代末の「開国・鎖国」論争の再来のような「外国人『入れる』VS『入れない』大論争」（2004年11月24日号）といった記事が、なぜこの第五期になって可能となったのか考察することにしたい。

IV 第一期（1989年～1993年）—「混住」というキーワード—

先述のように、第一期を象徴するキーワードは「混住」である。「混住思想」（1991年11月14日号）、「混住後進国ニッポン」（1992年12月10日号）、「混住社会ニッポン」（1993年9月23日

号) といった形で特集の見出しに掲げられる時、キーワードとしての「混住」とはいったい何を示しているのだろうか。

ここで注目したいのは、「混住」が記事見出し中に掲げられるのが“SIMULATION REPORT”と冠される特集記事であることだ。“SIMULATION”ということは、現実には想定される条件を取り入れて、実際に起こりうる状況を想定するとともに、オピニオン誌としての性格上、特定の価値関心に基いた提案や提言を行うということが特集として含意されているといっていよう。例えば、1991年11月14日号の特集「織田信長の『混住思想』に学べ」では、「出稼ぎ外国人100万人時代!」において「隣の異文化とつきあえないともはや商売ができない」、「彼らとうまく“仕事”をし、“生活”をしていくことなしにビジネスの成功はありえない」といった形で雑誌の主要読者である企業サラリーマン層の関心に沿った問題設定をしつつ、「21世紀を目前に控えた今、なしくずし的に、混住の時代を迎えるのか、理想と戦略をもってあたるのか」との問いを発している。要するに「混住」あるいは「混住社会」とは、日本人、日本社会が外国人との関係のなかで直面し、「理想と戦略をもって」主体的に対処すべき将来像ということになる。

では「混住社会」という将来像のなかで、「われわれ」=「日本人」や「日本」の主体性はどのような形で語られていくことになるのだろうか。また同時に、他者としての「外国人」や「外国」はどのような形で語られていくことになるのだろうか。以下では、第一期を前半(1989~1991年)と後半(1992~1993年)に分けたうえで分析していきたい。

(1) 第一期前半(1989~1991年) -他者性なき「外国人」と「混住社会ニッポン」-

この時期を代表する1991年11月14日号の特集記事(「織田信長の『混住思想』に学べ」)のなかで、将来像としての「混住社会ニッポン」を考える際の準拠集団となっているのは、歴史上の日本社会(例:織田信長の時代)と「混住先進国」としての諸外国の社会(例:ドイツ・ベルリンや中東・ドバイほか)である。

これら二つの準拠集団のうち、後者(「混住先進国」)を参照することによって日本社会の現状は「混住後進国」と規定されることになる。他方、前者(歴史上の日本社会)を参照することによって、将来における「混住社会」へ自らが対応可能であることが確認される。例えば、それは「混住思想」を体現していたとされる「日本人」としての織田信長への言及、あるいは「江戸時代以前『大陸難民』も『異教』も受け入れてきた歴史を思い出せば、ドイツ以上にうまくいく」といった語りを通じて確認されることになる。つまり現状では「混住後進国」でも、自らの歴史および諸外国の事例に学べば「混住社会」を自ら主体的に構築することは十分可能ですよ、というメッセージをこの特集は全体として発しているのである。そのうえで改めて現状は「後進」ではなく「成熟へのステップ」として肯定的に捉え返される。あとは編集部が1989年から1990年にかけて掲載された荒俣宏の連載記事(「開国異国助っ人奮戦記」)を紹介しつつ述べるように、外国人労働者を「使い捨てるパートタイム助っ人」として利用するか、「味方」として日本社会に

溶け込ませ「共生」の道をとるか、という選択が提示される。

表2 第一期前半の『SAPIO』在日外国人関連記事 (1989~1991年)

1989年	
6月8日	開国異国助っ人奮戦記 1回 今昔二流(ノン・エリート)外国人事情 (荒俣宏)
7月27日	「アパートへの正体不明の訪問者、無言電話、“内調”暗躍の噂もある」 *中国人留学生リーダー(李大興)
"	人手不足深刻化で待ったなし 企業現場の外国人労働者問題 (里見泰男ほか)
11月23日	日本初の外国人留学生向け就職情報誌を創刊 「ヤン・エンタープライズ」 越部陽一郎社長 (千葉香代子)
1990年	
2月22日	インドネシア衝撃同行レポート 善意か?人買いか? 『東南アジア花嫁輸入』業者の腐臭 (山谷哲夫)
10月25日	開国異国助っ人奮戦記 最終回 九州探訪編(後) 近代医学事始め 長崎・出島以来の“古教師”オランダ人軍医を冷酷に切り棄てた明治新政府の「御雇い外国人事情」(荒俣宏)
1991年	
2月28日	対談 日本の中の外国人 世界の中のニッポン人 (グレゴリー・クラーク/荒俣宏)
11月14日	<SIMULATION REPORT>織田信長の『混住思想』に学ぶ 出稼ぎ外国人100万人時代!隣の異文化とつきあえないともはや商売ができない
"	400年前の日本は「銀」と「ハイテク」のビジネス大国だった(津本陽)
"	ベルリン、ドバイほかの現実から見えてきた多人種、多文化社会へのステップ(吉岡忍)
"	混住社会ニッポン TOKYO混住MAP
"	英紙『エコノミスト』が分析 混住時代に備えた松下電器の“人材転入”実験
"	江戸時代以前「大陸難民」も「異教」を受け入れてきた歴史を思い出せば、ドイツ以上にうまくいく (G・ヒールシャー)
"	東京在勤タイ人ビジネスマンの証言 日本はキャプテン、アセアンは乗組員だ (ピャチャイ・ナパーワン)
"	いま問われる日本国籍なき「住民」の選挙権 トヨタも日産もホンダも外国人労働者なしではやっていけない (田中宏)
"	近代ニッポンの100年は外国人使い捨ての歴史だった (荒俣宏)
"	「出ていくアジア」から「迎え入れるアジア」に発想を転換せよ (深田祐介)

(注)大宅壮一文庫『大宅壮一文庫雑誌記事索引 CD-ROM 版』(各年版 紀伊国屋書店)を用いた記事検索(検索キーワード=「外国人」)に加え、実際に雑誌記事を閲覧したうえで筆者が作成。

では同じ特集のなかで、外国人はどのような形で表象されたのだろうか。じつは記事中において、外国人は日本人との差異を示す記号としての「異文化」、「他民族」という抽象的なカテゴリーとして論述されるか、「外国人労働者」、「外国人住民」といった制度的、政策的なカテゴリーとしてのみ議論の対象となっている。実際、雑誌記事の見出しをみればわかるように、そこには具体的な、例えば「中国人」や「イラン人」といった国籍名や民族名はほとんど出てこないのである。

国籍ではないが、「アジア」という地域呼称ならば記事中に出てくる。しかしそこで想定されている「アジア」あるいは「アジア人」とは「欧米(人)」と比較して、「文化的に共通するところが多い」、すなわち同質性の高い他者として想定されている。同様の同質性の想定は、「東京在勤タイ人ビジネスマン」の記事にも見られる。これも企業サラリーマンという『SAPIO』の中心的読者層からみれば、いわば会社の同僚外国人のような事例であり、国籍こそ違え学歴や職業経歴等において比較的自分たちとの同質性が高い外国人の事例である。外国人労働者といった場合に、一般的に想定されがちな未熟練の肉体労働者といった『SAPIO』の読者からみて職業的な

異質性の高い外国人の事例は、具体的な形では取り上げられていないのである。そのうえ記事では、そのタイ人ビジネスマンの証言として、「日本はキャプテン、アセアンは乗組員」という日本のアジアにおけるリーダー的役割への期待が語られる。

要するに、この第一期前半においては語られる「混住社会ニッポン」で想定されている外国人とは、具体的な他者性を帯びておらず、日本人との同質性の比較的高い他者なのである。このような他者性を縮減されて、日本人からみて理解可能でコントロール可能な客体として外国人が想定されている限りにおいて、はじめて政策主体としての日本人による「混住社会ニッポン」の構想が可能になっているのである⁶⁾。

「混住社会」といった場合に、日本人と外国人が同じ対等な主体として「共生」しているといったイメージを抱くが、第一期前半の『SAPIO』にみられるそれは、以上みてきたようにそうではない。「混住社会」を作り上げる「日本人」という政策主体が、同質的であり理解可能でありコントロール可能という、いわば他者性を縮減された客体（政策対象）としての外国人と表裏一体になっているという構図がそこにはある。とすれば、仮に外国人が他者性を帯びた存在として捉えられるようになれば、「混住社会ニッポン」とそれを作り上げる政策主体としての「日本人」という言説はおそらく揺らぐことになる。実際にその言説の揺らぎは、次の第一期後半の雑誌記事中に早くも現れることになる。

(2) 第一期後半(1992~1993年) -ゆらぐ政策主体としての「われわれ=日本人」-

第一期後半に入って1992年になると、第一期前半にはほとんどみられなかった具体的な国籍名や民族名が記事の見出しに出てくるようになる(「台湾ヤクザ」1992年2月27日号、「新華僑」1992年6月11日号)。これらの記事で、具体性を持って語られる外国人はもはや単なる政策対象、客体ではなく、「新宿歌舞伎町」を「巢窟」とする「国際マフィア」であったり、大挙して『『日本』を目指す』主体としてイメージされている。

このような外国人イメージの主体化の流れのなかで、特集「混住後進国ニッポンをうろたえさせる『外国人犯罪』」(1992年12月10日号)が組まれることになる。特集の序文は「混住社会の第一歩を歩み始めた日本で『外国人の犯罪』が目立ってきた。…(中略)…はたして、外国人犯罪の増加は真の混住社会への試練なのか、あるいはリボルバー社会への警鐘なのか。『共生』時代への難問を多角検証する」とその目的を述べているが、そもそも『SAPIO』における「混住社会」が同質的で他者性をどこか欠いた他者との「混住」を暗黙の前提としている以上、「外国人の犯罪」が目立ってきたという他者性の兆候が即、「試練」や「警鐘」として捉えられるのも当然であろう。

特集の中の記事「台湾マフィアは、いかにして日本の夜を制覇したか」は、ルポライターによるノンフィクション記事であるが、そこでは「台湾マフィア」は明らかに強い主体としてイメージされていると同時に、「組事務所もバッジもないが故に手も足もでない警察」という表現で、彼

らが十全な理解やコントロールが困難な他者性を孕んだ存在として描き出されている。また「台湾マフィアの手はしだいに外へ、伸び始めている」というように、ここでは外国人＝加害者（主体）、日本人＝被害者（客体）という図式が出てきている。

しかし一方で特集では、記事「怖がり、怯えているのは、外国人労働者たちの方である」に象徴されるように、逆に外国人＝被害者（客体）という図式も存在し、「外国人犯罪」の原因は、むしろ受け入れ体制の不備を放置し、外国人を不法という形で入れている日本社会に求められる。同様の理解は、外国人犯罪の背景に日本人の排外意識を指摘する記事（「普通の日本人の心の奥底に『ネオ・ナチ』の思想はないか 外国人労働者を犯罪に追いやる構造」）などにもみられ、これらの記事はともに外国人労働者を排除するのではなく、受け入れ体制の整備を主張するのである。また別の記事では、日本人の側の寛容の精神や異文化理解教育の必要性が主張される。

この特集においては、外国人が加害者＝主体、という図式が出現する一方で、外国人はむしろ被害者＝客体という図式が存在しており、そのうえで「日本人」側が「混住社会」の実現へ向けてなすべきことが主張されるのである。このように外国人犯罪という他者性（理解不可能性、コントロール不可能性）に直面して揺らいだ政策主体としての「日本人」は、外国人犯罪の原因を自分たち自身に見ることによって、「外国人」の他者性を直視することを回避する形でかろうじて維持されるのである。

それでは上記のような主体性の維持は、果たしていつまでも可能なのだろうか。1993年9月の特集「外国人犯罪黒書 新宿・池袋をNY並に放置したのは誰だ！ 新聞が真剣に論じようとしないう『混住社会ニッポン』の陥穽」では、序文において日本各地で頻発する外国人レイプ魔に関するデマを、「われわれ日本人が、どっと押し寄せてきた外国人労働者や不法滞在者にとまどい、混乱している証」とし、過去の反外国人感情がもたらした悲劇（関東大震災時の朝鮮人虐殺）を振り返りながら、「そうした過ちを繰り返さないためにも、“不法滞在”している外国人たちがどのような環境で、どのように暮らし、何を考えているのか、いまこそ正視する必要がある。そのうえで抽象的正義論などではなく、具体的な対応策をきちんとした法整備へのプログラムづくりに入るべきではないだろうか」と述べる。

この序文からは、「われわれ日本人」が政策主体として、「法整備のプログラムづくりに入るべき」と主張する点では、1992年12月10日号の先の特集と何ら変わっていないようにみえる。しかし、「“不法滞在”している外国人たちがどのような環境で、どのように暮らし、何を考えているのか、いまこそ正視する」ことは、これまで回避してきた外国人の他者性（理解不可能性やコントロール不可能性）の直視という事態をむしろもたらすのではないだろうか。だとすれば、それは「混住社会ニッポン」を実現する政策主体としての「われわれ＝日本人」のいっそうの揺らぎに繋がりはしないだろうか。

表3 第一期後半の『SAPIO』在日外国人関連記事(1992~1993年)

1992年	
2月27日	NY並抗争事件多発! 国際マフィアの巢窟になった新宿歌舞伎町 *台湾ヤクザ
6月11日	赤い資本主義『グレートチャイナ』大事典 新華僑 人間輸出 7000万人が「日本」を目指す (五音凌二)
12月10日	<SIMULATION REPORT> 混住後進国ニッポンをうろたえさせる『外国人犯罪』
"	怖がり、おびえているのは、外国人労働者たちの方である まず受け入れるための法の整備を急げ (石川好)
"	台湾マフィアは、いかにして日本の夜を制覇したか 組事務所もバツジもないが故に手も足も出ない警察 (溝口敦)
"	普通の日本人の心の奥底に「ネオ・ナチ」の思想はないか 外国人労働者を犯罪に追いやる構造
"	寛容なる混住国家・フランスが耐え続けているゲットーとの共生 *大都市近郊に住む「外国人ゲットー」の犯罪 (山中啓子)
"	単純な「開国論」「鎖国論」では流れ出る血は抑えられない *外国人労働者の受け入れ問題 (大沼保昭)
12月24日	短期集中シリーズ外国人犯罪 台湾マフィアは、いかにして日本の夜を制覇したか 第2回 日本の刑務所が凶悪「流氓」の格好の避難所になっている (溝口敦)
1993年	
1月14日	短期集中シリーズ外国人犯罪 台湾マフィアは、いかにして日本の夜を制覇したか 最終回 大量の「トカレフ」とともに中国黒社会の影が日本を覆い始めた (溝口敦)
4月 8日	LOOK JAPAN 問題提起 外国人労働者を景気の安全弁にした「経済エコノミスト」よ、「国際化論者」よ、いまこそ発言せよ (西尾幹二)
"	床屋あり、シシカバブ屋あり ペルシャの市場と化した代々木公園の1日 (坂本孝一)
5月27日	在日韓国人の眼 わが同胞・在日韓国人たちよ 「就職差別」「参政権問題」は日本側だけの問題か? (鄭大均)
6月10日	外国人労働者が増えたからといって「扇子でお立ち台」の日本人に失うほどの“文化の芯”があるか “外国人嫌い”の昭和一ケタ——西尾幹二氏の「鎖国論」への反論 (石川好)
7月22日	チャイニーズ・マフィア潜入報告 第2部 日本の夜を窺う香港黒社会 4回 オンナ、クスリ、どころかブラックマネーまで新宿歌舞伎町は中国マフィアが完全制覇した(溝口敦)
9月23日	300万円のロシア人花嫁 中国から締め出された人間買いこんどはロシアへ こんな恥ずかしい事をいつまで続けるのか (阿光豊)
9月23日	<SIMULATION REPORT> 外国人犯罪黒書 新宿・池袋をNY並に放置したのは誰だ! 新聞が真剣に論じようとしない「混住社会ニッポン」の陥穽
"	国際歓楽街新宿新事情 「イラン人は麻薬を確実に捌き、ナイフの殺しがうまい!」不良・不法滞在者を操る日本ヤクザと中国・コロンビアマフィア (溝口敦)
"	Jリーグの鹿島・もうひとつの姿 北関東80km圏都市を狙う「外国人犯罪ネットワーク」が出来上がっている! 仕事のある所には金もある (田村建雄)
"	環日本海有効船の暮で… 金沢港はなぜ、半年間もロシア船の入港を拒否したのか 北陸の古都住民を困惑させるささいな犯罪 (東正仁)
"	警察幹部の本音批判 売春婦をオーバーステイで逮捕しても、すぐ“放免”とは何事だ 法務省、外務省の無責任対応
"	「外国人の犯罪」93年上半期実録データ とうとう日本人が狙われ始めた!
"	不法滞在外国人の反論 ビザが切れても外国人登録証を発給 “3K労働力が欲しいニッポン”の身勝手 「日本の入管はなぜ私たちをフリーにしているのか」(清水典之)
"	刑事政策学からの提言 代々木公園のイラン人締め出しなど何の役にも立たない! 必要なのは組織化を阻む法の整備だ (加藤久雄)
"	情報不足の台湾マフィアが気掛かりだ (日高義博)
10月28日	ストリート・エンジェル マニラの陽気で悲しい天使たち 第1回 メール・オーダー花嫁 幹旋料30万円と引き替えに、マニラから日本に渡ってきた“花嫁”の告白 (家田荘子)
11月11日	ストリート・エンジェル マニラの陽気で悲しい天使たち 第2回 ジャッピーノの母ヘレン 少女趣味の便箋にローマ字で綴られたラブレターに2万円を同封してきた男との3年間 (家田荘子)
11月25日	マニラ発緊急レポート 出稼ぎダンサーはなぜ死んだのか! 100万人が見た反日フィリピン映画『JAPAYUKI』が告発するニッポンの恥部 (中村嘉孝)
12月 9日	ストリート・エンジェル マニラの陽気で悲しい天使たち 第4回 「フィリピン人は嫌いだ」 “ジャバゆき”のリカが、結婚を望んだ日本人男性とその両親からうけた仕打ち (家田荘子)
12月23日	ストリート・エンジェル マニラの陽気で悲しい天使たち 第5回 淋しいクリスマス 「夢はカリフォルニア大学留学」麻布十番の1DKマンションで仲間4人と共同生活をおくる「ジャバゆき」ミキ (家田荘子)

(注)大宅壮一文庫『大宅壮一文庫雑誌記事索引 CD-ROM 版』(各年版 紀伊国屋書店)を用いた記事検索(検索キーワード=「外国人」)に加え、実際に雑誌記事を読んだうえで筆者が作成。

特集では、ルポの手法を用いたノンフィクションの形をとって「実態報告」がなされるが、記事「国際歓楽街新宿新事情」で「イラン人は麻薬を確実に捌き、ナイフの殺しがうまい」とあるように、外国人犯罪の巧妙化、凶悪化が強調され、別の記事見出しでは「北関東80km圏都市を狙う『外国人ネットワーク』」や「環日本海友好の裏で…」という形で、外国人犯罪の広域化や地方化が、さらに記事中においても外国人犯罪の多様化や複雑化が指摘される。要するに、外国人犯罪の怖いイメージがより強まるとともに、外国人犯罪の把握や統制の困難さが強調されるのである。そのなかで外国人＝加害者（主体）、日本人＝被害者（客体）という図式が、雑誌記事の見出しとしても前面に出てくる（「『外国人犯罪』93年上半期実録データ とうとう日本人が狙われはじめた」）。

確かにこの特集においても前の特集と同様に、外国人をむしろ被害者とみなす記述がみられる。例えば、「3K仕事を嫌いながら、表向き外国人の就労を認めない日本社会の歪みが彼らをも歪ませている」などの記述がそれにあたるが、特集全体としては外国人＝加害者の図式がいっそう強調されるようになったのは否定できない。

では外国人犯罪の理解不可能性やコントロール不可能性の強調や、外国人イメージの加害者という形でのいっそうの主体化は、「混住社会」における政策主体としての「われわれ＝日本人」の像をどのような形で変容させるだろうか。特集では外国人犯罪増加の背景に、「法務省や外務省の無責任対応」や「どっちつかずの、というより何も手を打たなかったことが、現在の状況を生み出した」といった過去の政策（あるいは無策）の帰責の問題は語られるが、では今後どうすべきかといった積極的な「混住社会」実現のための政策はもはや語られない。だとすれば代わりに何が語られることになるのか。外国人（犯罪者）＝加害者（主体）というイメージに基づく対策として、治安対策に焦点が当てられるようになる（例えば、記事「刑事政策学からの提言 代々木公園のイラン人締め出しなど何の役にも立たない！」）。ただしこの特集においては、外国人（労働者）＝被害者というイメージもまだ残っているために、語られる治安対策は不法滞在の外国人労働者らを直接の対象にはしてはならず、彼らを食い物にしているとされる日本の暴力団や海外からのプロ組織犯罪集団を主に照準したものになっている。

記事中で「もっと現実に即して各省庁が連携した法の整備を緊急に図らなければ外国人の犯罪に歯止めはきかず、日本は世界に冠たる犯罪天国になる」という危機感とともに語られる治安対策は、もはや「混住社会」を実現するための政策とは言い難い。実際、第一期を象徴した「混住」というキーワードは、この特集を最後に『SAPIO』誌上の在日外国人関連記事からは消えてしまうのである。これは同時に「混住社会ニッポン」を実現する「われわれ＝日本人」という政策主体についての言説が、もはや『SAPIO』において失効したことをも意味するだろう。

V 第二期(1994年~1995年) - <有益> 対 <有害> 図式の萌芽 -

第一期後半を最後に、「混住社会ニッポン」を実現する政策主体としての「われわれ=日本人」という言説が失効した後、どのような外国人言説が現れることになったのだろうか。1994年10月27日号の特集「犯罪輸出大国中国の罠 新宿歌舞伎町を戦慄の町に変えた国際盲流の実態」に現れる外国人言説の特徴は、外国人=加害者(主体)という形でネガティブなイメージがさらに強調されるようになった点にあるだろう。

表4 第二期の『SAPIO』在日外国人関連記事(1994~1995年)

1994年	
7月14日	チャイナ・ロシア・ニッポン 複合犯罪集団が日本の“安全神話”を揺さぶる! 「蛇頭」「密入国」は氷山の一角! *チャイナマフィアの密入国の手引きと、ロシアンマフィア (溝口敦)
10月27日	<SIMULATION REPORT> 犯罪輸出大国・中国の罠 新宿歌舞伎町を戦慄の町に変えた国際盲流の実態
“	解放軍ぐるみ、寒村ぐるみの野盗化が横行! 伝統の「土匪国家」が復活し始めた「千島湖事件」驚愕の背景 (黄文雄)
“	青龍刀抗争 日本の法律が通用しない! 中国人租界と化した新宿歌舞伎町の闇チャイナ・マフィアに加え、中・台特務機関が入り乱れる半治外法権状況を抉る (溝口敦)
“	密航者たちの告白 犯罪も日雇いも、出稼ぎは同じ。10万円で耳をそぎ、20万円で腕を切断、30万円なら殺しだしてする! 一攫千金を夢みる密入国者が犯罪者に変身する軌跡 (森田靖郎)
“	バッコする拝金主義の陰で 天安門乱射事件は氷山の一角! 『落伍者の群れ』の暴走が始まった (五音凌二)
11月10日	S A P I O時代通り 「うち、関西弁好きやねん」!? 在日外国人の間で“アンチ標準語”ブーム
1995年	
2月23日	国境を超えて結託する『国際マフィア連合』戦慄の実態 「阪神大震災」瓦礫の街に上海マフィアが大挙上陸? (溝口敦)
4月13日	<SIMULATION REPORT> 「新韓国人」はチャンスの島ニッポンをめざす
“	日韓新時代の生き方 「対日コンプレックスなんて知らない」急台頭! 「新韓国人」とどう付きあうか もはや韓国とか日本とか、国にとられない時代だ (深田祐介)
“	戦後50年目のサクセス・ストーリー 「在日」朝鮮・韓国人実業家はいかにして成功の果実を手にしてきたか 「日本のビル・ゲイツ」孫正義ほか (辺真一)
“	これが新韓国人パワーの実態だ! コリアン・マネー世界進出大図解
“	在日2世の旗手の新感覚 過去の「歴史」から自由になれば日韓共通の「幸せの根源」が見えてくる いまソウルで注目の若手経営者の直言 (郭正昭)
“	いつまで続く文化鎖国Ⅰ 田月仙さんが東京公演を前に吐露した「在日としてのニッポンへの愛着」 平壤、ソウルで歌った韓国籍オペラ歌手
“	いつまで続く文化鎖国Ⅱ 都はるみはなぜ“父の祖国”韓国で歌えなかったのか “ソウル公演”中止の裏側
“	滞日韓国人の目 在日コリアン2世、3世にみなぎるニッポンを支える自信 「半日本人」と蔑まれてきた「在日」の本当の闘いはこれから始まる (呉善花)
“	日韓文化摩擦の側面 見栄っ張り韓国企業が、世界一厳しい日本市場で成功する条件 進出先は「港区」と「銀座」に集中! (池東旭)

(注)大宅壮一文庫『大宅壮一文庫雑誌記事索引 CD-ROM 版』(各年版 紀伊国屋書店)を用いた記事検索(検索キーワード=「外国人」)に加え、実際に雑誌記事を読んだうえで筆者が作成。

それまでは単純に外国人=加害者(主体)というばかりでなく、犯罪組織や日本社会による被害者(客体)としての、かわいそうといったポジティブなイメージも存在してきたのだが、例えば記事「密航者たちの告白 犯罪も日雇いも、金稼ぎは同じ。10万円で耳をそぎ、20万円で腕を切断、30万円なら殺しだしてする 一角千金を夢みる密入国者が犯罪者に変身する軌跡」で強調

されるのは、ポジティブ（かわいそう）な密入国者像ではなく、ネガティブ（凶悪）な犯罪者あるいは犯罪者予備軍としての密入国者像である。特集では、彼ら（中国人）の流入を防ぐ手段はなく、これからも流入が続くであろうし、その一部は確実に犯罪を運んでくるとされる。そして、既に彼らが流入して定着しつつある新宿・歌舞伎町は、「日本の法律が通用しない！ 中国人租界と化し」、チャイナ・マフィアらが入り乱れた「半治外法権状況」にあるとされる。ここに見られるのは彼ら（中国人）の流入や定着、犯罪行為に対して、コントロールする能力を失ってしまった「われわれ=日本人」という姿である。強い加害者（主体）としての「中国人」に対して、「日本人」や「日本社会」は弱い被害者（客体）としてイメージされることになる。よって第一期にみられたような政策主体としての「われわれ=日本人」という像は、記事中にそれをまったく見いだすことができないのである。

それでは外国人が強い主体としてイメージされている時、そのイメージは中国人の場合がそうであったように、常にネガティブな形をとるのかということそうではない。1995年4月13日の特集『『新韓国人』はチャンスの島ニッポンをめざす』でとりあげられる「新韓国人」とは、「日本人の失ったエネルギーに満ちて」おり、「対日コンプレックス」を持たず、「国際化」に対応した「柔軟な日本観」を抱いているとされる。また別の記事では日本に進出した「見栄っ張りな」韓国企業が、世界一厳しい日本市場での成功を目指している姿が語られる。

このような新韓国人や韓国企業のイメージは明らかに強い主体のそれであるが、記事ではビジネスパートナーとして好意的に紹介されている。そのうえで在日コリアンも含めて彼ら「新韓国人」をいかに「活用」していくかが日本企業の課題として提示される。

また別の記事では「在日」朝鮮・韓国人実業家のサクセス・ストーリーが、「日本でもコリア系の人々が社会の大きな力となって、経済・社会の支えとなっている」という序文とともに紹介され、記事の最後は「日本社会の欠かせぬ構成員として確実に日本経済の一翼を担っていくだろう」という言葉で締めくくられる。同様の「在日」観は、記事「在日コリアン2世、3世にみなぎるニッポンを支える自信」にもみられる。この記事においては在日コリアンが世界のマイノリティのなかでも特筆大書すべき経済的成功が収めたことが強調され、在日コリアンは民族差別の問題を語るよりも、「日本経済の一翼を担っているのだ」という自信をもって発言して欲しい、との希望が述べられる。ここでも在日コリアンのイメージは肯定的だといえよう。

しかし強い主体としてポジティブにイメージされる時に、「日本社会」からみた彼らの有用性（日本社会や経済を支える）や活用可能性が同時に語られていたことを忘れてはならない。またそのような有用性や活用可能性が語られる際の暗黙の前提として、外国人が一定の経済的成功を収めていることや、「従来の韓国人」のように過去の日本による植民地支配を持ち出したり、「これまでの在日」のように日本社会における民族差別を強調したりしない、いわば日本（人）側にとって都合の良い他者像が期待されてもいる。

第二期におけるこれら二つの特集を合わせて考えると、そこには「新韓国人」や「在日コリア

ン2世、3世」の成功者のような日本にとって<有益な外国人>と、「密航者」や「外国人犯罪者」のようなく有害な外国人>という二項対立的な図式が現れつつあることを確認できるだろう。第三期以降の『SAPIO』において、この<有益な外国人>-<有害な外国人>という認識図式がどのように展開していくことになるのか。次の機会に改めて検討することにしたい。

<注>

- (1) 外国人言説とは、「(自)国民」対「外国人」という形で二項対立的に構成される概念として「外国人」を語る言説を指す。であるから「外国人」といった場合に、居住地や逗留地が自国の領域内である否か(例:「在日外国人」か「在外外国人」か)は論理的には問われない。しかし本稿の分析においては、「外国人言説」の「外国人」とは「在日外国人」の意味で用いている。また「在日外国人」という表現は一般には日本での永住権や永住の意志を持つか、または実態として定住している外国人を意味する場合が多いが、本稿では日本国内に居住もしくは滞在する外国人すべてを指している。「在日外国人」&「滞日外国人」という表現の方がより正確ではあろうが、ここではより簡潔に「在日外国人」を両方の意味を合わせ持ったものとして用いたい。
- (2) 各誌の印刷部数は、日本雑誌協会ウェブサイト(2005年10月末現在)上の「掲載各誌・発行部数リスト」(<http://www.j-magazine.or.jp/FIPP/FIPPJ/F/index.htm>)による。
- (3) もちろん検索キーワード「外国人」でヒットした記事になかには、例えば外国人の日本観といった必ずしも在日外国人に関連しない記事も含まれるだろうし、逆に在日外国人に関する記事でも「外国人」ではヒットしないが、例えば「在日」ならヒットする記事もあるだろう。これらはあくまで目安としてのデータであることを確認しておきたい。
- (4) 2000年4月9日の陸上自衛隊練馬駐屯地創隊記念式典における石原東京都知事のスピーチの内容が「三国人」発言として注目を浴びた。以下はそのスピーチの一部である。

「今日の東京を見ますと、不法入国した多くの三国人、外国人が非常に凶悪な犯罪をですね、繰り返している。もはや東京の犯罪の形は過去と違ってきた。こういう状況を見まして、もし大きな災害が起きた時には大きな騒擾事件すらですね想定される。そういう現状であります」

なお本稿の問題関心と重なる意味で、グローバル化との関わりから「三国人」発言を論じたものとして、テッサ・モーリス＝スズキ「新たな市場に出荷された古い偏見-オーストラリアから見えてくる石原現象の素顔」[モーリス＝スズキ, 2002]を挙げておく。
- (5) 他者性については[菅野, 2003]を参考にした。「他者とはたんに丸ごとすべてを理解できない『非知性』を帯びた存在である以上の何か」、「〈私〉のことを〈私〉の許可なく勝手に対象化してしまうような存在」であり、「この点にこそ、他者がまさに『他者性』(=他者であるという本質的な性質)を帯びた存在だということのポイントがある」[菅野, 2003: 128]。本

稿では、他者性を自己にとっての理解不可能性とコントロール不可能性という意味で用いている。

<参考文献>

菅野 仁 2003 『ジンメル・つながりの哲学』日本放送出版協会。

倉 真一 2000 「外国人のイメージ—日本にマスメディアにおけるイラン人を事例に—」『宮崎公立大学人文学部紀要』8(1), 宮崎公立大学: 71-89。

_____ 2002 「1990年代日本における入国管理政策と非行性の産出」『宮崎公立大学人文学部紀要』10(1), 宮崎公立大学: 67-87。

テッサ・モーリス＝スズキ 2002 「新たな市場に出荷された古い偏見—オーストラリアから見えてくる石原現象の素顔」『批判的想像力のために—グローバル化時代の日本』平凡社: 112-127。

吉見俊哉 2003 「雑誌メディアとナショナリズムの消費」『カルチュラル・ターン、文化の政治学へ』人文書院: 261-279。

<参考資料>

大宅壮一文庫『大宅壮一文庫雑誌記事索引CD-ROM版』(1988~2003年版) 紀伊国屋書店。

日本雑誌協会「掲載各誌・発行部数リスト」<http://www.j-magazine.or.jp/FIPP/FIPPJ/F/index.htm>

_____ 「JMPA読者構成データ」<http://www.j-magazine.or.jp/FIPP/FIPPJ/E/flame3.htm>

(いずれも2005年10月末現在)